

創基 200 周年

山口大学

来た道



目次

- 1 山口講堂
- 4 建学の祖上田鳳陽
- 6 山口講習堂
- 9 山口明倫館
- 11 山口中学
- 12 関連資料
- 17 年表・参考資料

山口講堂から

山口中学へ

列強のアジア進出

1840~42年 アヘン戦争
アヘンの輸出をめぐるイギリスと清が戦争

1842年 南京条約
清の敗北

世界の動き

開国シナサイ!



1825年 外国船打払い令

1841年 天保の改革

1854年 日米和親条約締結

1858年 安政の大獄
老中・井伊直弼、開国反対派弾圧

修好通商条約締結
米英仏蘭露と不平等条約

1860年 桜田門外の変
水戸藩浪士ら、井伊直弼暗殺

1862年 和宮降嫁
公武合体の一環として孝明天皇の妹・和宮と将軍家茂、結婚

坂下門外の変
尊王攘夷派の水戸浪士ら、安藤信正を襲撃

老中に久世広周、安藤信正ら

薩摩藩主・島津久光入京
尊王攘夷派の動きを牽制

八月十八日の政変
公武合体派の薩摩藩と会津藩が結んで、尊王攘夷派を京都から追放

幕府、各藩に攘夷決行通達
5月10日を攘夷決行日とする

1863年 薩英戦争

1864年 蛤御門の変
京都御所を襲撃

第一次長州征伐

第二次長州征伐

1866年 薩長同盟

1867年 大政奉還・王政復古の大号令

1868年 五箇条の御誓文

1869年 江戸城開城

国の動き

1837年 大塩平八郎の乱



開国!

長州藩の動き

1840年 天保の改革
村田清風による財政改革
人材育成にも力を入れる

1831年 天保の大一揆

相次ぐ風雨洪水

1857年 吉田松陰、松下村塾をおこす



安政の大獄で吉田松陰処刑

安政の改革
周布政之助による改革
広く人材を登用

1861年 長井雅楽、「航海遠略策」を幕府に上申

「航海遠略策」とは？
不平等条約を破棄し、攘夷を行う(破約攘夷)ではなく、公武合体、積極的な海外進出、開国を行うとする考え。

尊王攘夷論



藩論転換!

毛利敬親、山口に移る
攘夷に備える

久坂玄瑞、尊王攘夷論
高杉晋作、桂小五郎らも同調
藩論、破約攘夷に転換

山口移鎮

幕府に攘夷決行を迫る
下関で外国船砲撃
攘夷決行日...

停戦協定
下関封鎖解除

敬親
萩に戻る

内乱

急進派

俗論派



1865年 高杉晋作、俗論派を破る

挙兵!

山口大学の来た道をたどってみると、そのはじまりは1815(文化12)年、上田鳳陽によって設立された山口講堂にあります。

今期は山口講堂設立から、幕末動乱の時代を経て山口中学へと至るまでをご紹介します。

明治維新

1815~ 山口講堂

1815年、上田鳳陽は山口に学問所を設立しようと藩に申し立てを行う。藩や周辺の豪商らの協力のもと、山口講堂が完成する。

山口の教育の礎となる。

1845~ 山口講習堂

財政逼迫や農民一揆などを背景に藩は人材育成に力を注ぐ。山口講堂は山口講習堂と改称。1860年、藩は山口講習堂を明倫館の直轄とすることを決定。翌年には長山(亀山)に移転した。

1863~ 山口明倫館

1863年、攘夷決行のため藩庁は山口に移転。山口講習堂は山口明倫館となる。時代の動乱の中で一時廃止も余儀なくされたが、山口は学都として栄えていく。

1870~ 山口中学

明治になり新政府による教育改革が行われる。山口明倫館は山口中学となった。廃藩置県のは、県の直轄として存続。

山口講堂

文教都市山口

江戸時代後期、各藩では財政難を打開すべく藩政改革が行われた。その中で、教育は改革の重要な軸のひとつとみなされ、相次いで藩校が創設された。幕藩体制の揺らぎに対応することができ、同時に時代を見据えた政策を推進できる、有為な人材の育成を期待していたためである。

周防と長門を統括する萩藩もまた、国家興隆の基盤は教育にあるとし、全国に先駆け、藩校明倫館を中核に、領内のいたるところに郷校、寺子屋、私塾等を設けた。教育内容は、明倫館のものを範とし、まさに教育立国の様相を呈していた。

山口大学の淵源にあたる山口講堂も、このような時代の象徴的存在として設立された。

山口講堂が造設されたこの山口は、今もって文教都市として語られる町である。山口が歴史の表舞台に登場するのは室町時代になってからである。それまでは一農村に過ぎなかったが、守護大名・大内弘世が京の都に似ていた山口の地をたいそう気に入り、居を構えたことが転機となった。京都文化の移入のため、多くの文化人が大内氏によって庇護されると同時に、大陸からの先進文化も受容されたため、「大内文化」が花開いた。ここに文教都市・山口の基盤ができあがった。

大内氏の足跡を継いだ毛利氏の時代も、山口は治世上の要塞として萩、三田尻と並び「三市」と称され、萩の明倫館、三田尻の越氏塾^{えっしじゅく}、そして山口の山口講堂と、修学の道が開かれたのは必然の事であった。



五重塔

山口講堂の造設



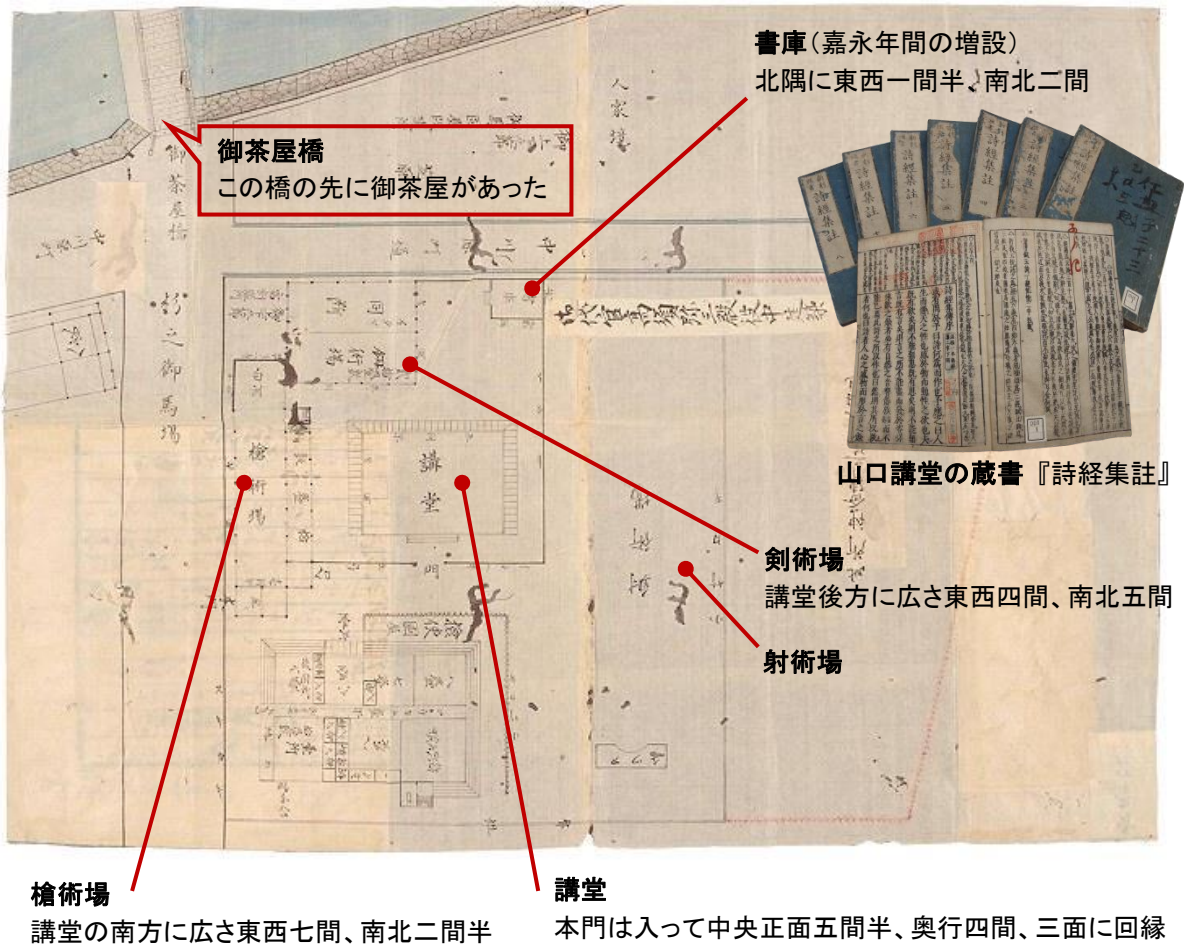
山口講堂の匾額

萩藩士・上田鳳陽(茂右衛門)は、寛政12(1800)年11月、萩に遊学して藩校明倫館に入り、学頭・繁澤規世に師事した。

文化6(1809)年11月まで、9年の長きにわたり在学し、儒学、国学を専攻した。明倫館での修学を終えた鳳陽は山口に帰郷し、在住諸士の教育にあたった。しかし当時の山口には学問所はなく、書籍も乏しかったため、文化12年2月、学舎の建設を発起したのである。

鳳陽は、当時の明倫館の学頭・中村九郎兵衛を通じ、「山口の町に武芸の稽古場、馬場はあるものの、いまだに本格的な学問所がないため、自力でも学問所を開設したい」と、藩に申し立てを行った。藩はこれを受け、建築用材を藩有林から採取することを許可するとともに、資銀も下給し、中村九郎兵衛にもその事業を援助させた。山口の豪商や周辺の豪農らの協力も相次ぎ、4月、中河原の山口御茶屋(藩主の参勤や領内巡視及び他藩役人との応接のために設けられた公館)の前方に、講堂が落成し、これを「山口講堂」と呼んだ。講堂は今の山口公設市場の位置に建てられた。古地図によると、藩の役の「検使小屋」の敷地の一部に講堂があり、正面幅が約10m、奥行きが7.3mで三面に回縁のついた小規模な平屋だったようだ。

山口講堂剣鎗射術場并検使子固屋共地差図(山口県文書館所蔵)



基を文化の遠きにおきて

講堂造設後の文化12(1815)年4月、藩主・毛利齊熙^{なりひろ}は氷上山興隆寺参詣の途中に、山口御茶屋で在住諸士の文武諸芸を観閲した。鳳陽の門弟の河野喜兵衛以下18名が孫子の軍形篇、孔子の家語観周篇並びに詩経の講釈をし、平岡弥三右衛門らの門弟80名がそれぞれ武芸を披露したという。翌日には馬術、騎射、打毬等を演じた。山口講堂の開設を機として行われた催しではあるものの、藩主もこの講堂開設を奨励していたことが窺われる。以後、山口来訪時や江戸参勤の帰途などには、藩主が山口講堂の門弟の勉学を観閲することが慣例となり、萩明倫館・三田尻越氏塾と共に書籍も下賜されるようになった。

こうして山口講堂はこの地で重要な教育機関として時を刻み、山口における教育の礎を作った。山口大学8学部中、最も古い歴史を持つ経済学部の前身「山口高等商業学校」の校歌には次のようにうたわれている。

仰ぐは鳳翺臨むは榎野 基を文化の遠きにおきて
時世の進みに伴ひ来る 山口高等商業学校

ここにある「文化」は、すなわち山口講堂の開設された文化12年を指している。山口大学の基となる山口講堂から200年。その志は山口大学へとつながっている。

講習堂周辺—現在の面影



山口講堂跡

山口公設市場(平成24(2012)年に解体)。この中ほどに講堂が建っていたようである



山口御茶屋跡

現在のクリエイティブスペース赤レンガ付近
御茶屋は参勤交代の際の休憩所として使用されていた



御茶屋橋

名のみが残り歴史を伝えている

建学の祖 上田鳳陽

山口に学問所を

上田鳳陽は、明和6(1769)年、萩藩の下級藩士・宮崎猪兵衛在政の三男として生まれた。幼少の頃、上田平右衛門清房の養子となり、清房の亡くなった後はその跡を継いだ。幼い頃から学問が好きで、山口では文学を学んでいた。

寛政12(1800)年11月、32歳にして藩校明倫館に入学する。当時、明倫館には後に学頭となる山県太華や中村牛莊らがあり、特に太華とはいつも論じ合っては切磋琢磨し、志を語り合い、生涯の友となった。

鳳陽は、将来を期待され、藩費生の待遇を受けるとともに、3年という規定年数を超えての修学が許可され、文化6(1809)年まで儒学や国学を学んだ。

文化6年11月、明倫館での修学を終え帰郷した鳳陽は、山口に住む藩士の教育にあたる。山口は大内氏時代には文教の中心地であったのだが、その滅亡後は大内文化も衰退していた。この頃、山口周辺では萩の藩校明倫館のほか、三田尻にも越氏塾が開かれ、学館が多くできていた。しかし、山口には武芸の稽古場はあるものの、学問を指導する環境は整っていなかった。鳳陽はこのことを非常に憂い、文化12(1815)年、学問所の設立を思い立ち、その実現に向けて奔走したのである。この時、鳳陽47歳であった。

山口講堂を開設した鳳陽は、藩主に大いに褒められ、下級武士の身分から、中級武士へと昇格し、研究に専念できるよう儒役という役職に引き上げられた。


文化十二年四月十五日

無給通本人
上田茂右衛門

△ 一代遠近附被仰付
△ 一代儒役

右文学抽令出精候段達
上聞候、往々御用ニ相立諸人之
励ニ茂可相成儀ニ付、身柄一代
遠近付ニ被仰付儒役ニ被召仕
学問指南被仰付候、尤二代目与者
最前之身通江被差返平士ニ可
被召仕候事

右之節詮議
前簾明倫館入込文学出精追々上達仕
近年者於山口門弟取立仕候処、只今之身通ニて者
教導筋間茂御座候由学頭役中村九郎兵衛より
内々申立之趣茂有之候、山口ニ而武芸之儀者
稽古場も有之、馬場等も御座候処、学問所
無御座ニ付、近比彼者自力を以家塾をも
取立候由御座候、偏ニ学問一途ニ相傾キ居候
者之由相聞候間、本文之通被仰付候而者
いかゞ可有御座哉者伺之上右之通被仰付候事



「御賞美先例」二十七・三篇(山口県文書館所蔵)
鳳陽の昇格や山口講堂開設の経緯などが分かる

晩年も学問、教育を追及

山口講堂開設の後は経営を門人に任せ、かねてより希望していた国学の研究のため明倫館に再入学し、館内に秘蔵の国学関係の書籍、主に大黒屋本と呼ばれている書籍を研究した。



大黒屋本とは？

国学者・契沖の門下で、長州藩御用達であった京都の町人・大黒屋今井似閑が享保年間に契沖の遺著及び、自らが長年集めていた国学関係の典籍を京都の上賀茂神社の神庫に奉納しておいたものを、明倫館創立の際に伝写したもの。現在は山口県立山口図書館に保存されている。

明倫館での研究を1年程行った後、鳳陽は再び山口に戻り、講堂の経営に生涯をささげた。天保5(1834)年には、藩主敬親より自筆の聖号を下賜されるとともに、その表装用として紋章入りの茶地金欄織の布を与えられた。翌年、これを使用した表装を山口講堂に納め、志ある人々に礼拝を許した。

また、鳳陽は儒学だけではなく国学にも精通し、故事にも詳しくあったため、山口代官から委嘱され、「風土注進案」の編纂にもかかわった。「風土注進案」は、敬親の命により、防長両国の各村落について故事来歴や地理など数十項にわたる項目を調査し、それをとりまとめ、町村から注進する形式で、一町村ごとに一冊に編纂した文書である。鳳陽が編纂にあたった「山口宰判風土注進案」は、数ある風土注進案の中でもその精細さから高く評価されている。



山口風土注進案
(山口県文書館所蔵)



上田鳳陽の墓 (山口市乗福寺)
碑銘は山県太華によるもの

年を重ねてもなお、学問や教育への志は高く、変わらず藩士の教導に努めた。藩はそれを賞して、鳳陽の晩年にも昇格や増給を行っている。鳳陽がいかに地方の文教開発に寄与し、また藩がそれを評価していたかがうかがえる。

嘉永6(1853)年、鳳陽は85歳でこの世を去った。鳳陽の遺したものはあまりに大きく、山口における教育の礎は鳳陽によって造られたと言って過言でない。

鳳陽先生って、どんな人？

- 80歳を過ぎてからも健脚、食欲旺盛。視力もよく、髪も黒かった。
- とにかく読書家。真理発見に狂喜したり、自らを罵り哭いて、周囲を驚かせることも。
- 古文書や古器物は遠く離れたところでも見に行くほど好き。
- 情に篤く、尊王攘夷の志士となった友人がこっそり訪ねてきてくれた時には、ごちそうでもてなし、帰る際にはいつまでも見送り続けた。

山口講習堂

文武の総合学舎へ

山口講堂では鳳陽の他に、武芸の師家が数名おり、また門弟の中でも特に優れた者を選んで助講に任じていた。組織が整備されるとともに、剣術・槍術・馬術・射術など武芸の稽古場としても、また整備されつつあった。

これは、人材育成のために文武を奨励した藩の天保改革にも沿っており、設立当初から公的教育機関の性格を帯びていた山口講堂は藩校明倫館拡張の機運に伴い、次第に明倫館の支校的存在となっていく。



山口講習堂玄関

山口県鴻城高等学校に現存
鴻城義塾創設にあたり山口中学校より譲り受けた

弘化2(1845)年、鳳陽は藩に請うて「山口講堂」を「山口講習堂」と改称し、山口附近における文武諸芸稽古場の総名とした。山口講堂設立から30年を経て、山口講習堂は名実ともに山口における文武の総合学舎へと発展を遂げたのである。

山口や近郊に在住の諸士の子弟は、山口講習堂で学び、中でも成績の優秀な者は明倫館へ進学した。このため、山口講習堂は藩における人材育成の要衝を担うこととなった。



こんな人も！

後の明治維新で活躍する井上馨も、山口講習堂から明倫館へ、という進学の道をたどった一人。

井上馨



巳ノ正月
上田茂右衛門
御間届相成候様ニ奉願候
以上
申出之通被仰付候事
山口文學所之儀是迄講堂と
相唱來候處、以來講習堂之
稱號ニ任、彼地文武諸稽古場之
惣名も相兼度奉存候間、此段
覺

「御賞美先格書抜」

山口講習堂への改称の申し出が記されている

その頃、藩校明倫館では…

享保4(1719)年の創設から、文武の奨励に努めてきたが、14代藩主の敬親の時代を迎え、さらなる発展をみた。敬親は人材育成、文教政策に重きをおき、修学の場の狭隘化や散在を改善するため、移転新築による規模拡大、学政の統一を図った。弘化3(1847)年12月、明倫館再興の令を出し、城下の江向に明倫館を造営した。

敬親は、藩の財政緊縮の際にも、明倫館の経費は節約せず、西洋学所を設けるなど、さらなる拡張を進めた。

山県半蔵による改革

嘉永6(1853)年、鳳陽は85歳で逝去する。以降、山口講習堂は高橋真作、松原一右衛門が引き継いだ。萩藩による明倫館の改革に伴って、山口講習堂にも幾多の改正が加えられた。

安政5(1858)年、藩は、文武督励のため稽古係を派遣し、翌年には山口講習堂の稽古方諸経費は明倫館が負担することとした。さらに同年9月、明倫館助教の山県半蔵(宍戸^{たまき}璣)を、学事を監督する督学として派遣。山県の着任によって、山口講習堂の改革は大きく進み、また明倫館の影響もますます強まっていった。



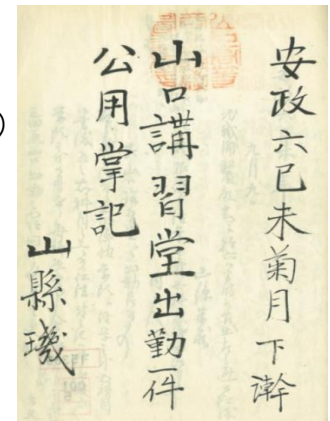
山県半蔵

山県は山口講習堂の講師らと協議の上、明倫館の教育内容に近付けるため、順次、課目の改正を行った。講義も明倫館に準じて毎朝早朝から午前8時過ぎまで行うことにした。また、教科書の不足を補充し書台などの什器も新調、畳の張り替えや壁・屋根の修繕を行うとともに塾舎も設け、施設面でも整備を進めた。

着任からわずか3か月で、山県は侍講(君主に学問を講じる者)に抜擢されたため、帰萩することとなったが、周囲の強い請願により、引き続き督学を併任した。

万延元(1860)年3月、山県は世子・定廣の東行への同行を命じられたため、後は三田尻越氏塾に出役中の小田村伊之助が兼務することとなった。

山口講習堂出勤一件公用掌記
山県の講習堂の出勤記録



同年、藩は銃陣編成の大改革を行い、新たに洋式銃陣を採用した。明倫館でその操練が開始されたことに伴い、地方に在住の諸士もその技術を習熟するため教練を行うこととなった。山口では、講習堂の西方、亀山の東麓に教練場を設け、明倫館の規則に準拠して操練を行った。

明倫館の直轄に

万延元(1860)年11月、藩は山口講習堂及び三田尻越氏塾を明倫館の直轄とすることを決め、28日にこれを発令した。従来は学制が明倫館に準拠しているのみであったが、これ以降、文学関係の諸役は全て明倫館から派遣され、両地の教授は明倫館の助教、都講は同舎長のうちからそれぞれ兼務することになった。

地方の一学問所からスタートした山口講習堂は、藩の教育システムの中に組み込まれ、さらなる発展を遂げていくこととなる。

講習堂の移転

明倫館の直轄になって後、山口講習堂の規則はますます整い、就学人員も増加したが、その一方、校舎は狭隘・老朽化が目立ち、さらに町家に隣接していたため拡張の余地もなかった。このため、山口代官から藩へ移転についての稟議が出された。

万延2(1861)年、藩はこれを受け入れ、新たに亀山東麓の空地に移転改築することが決まった。この地は以降、学校の変遷を経つつ、山口大学経済学部まで使用された。(現在は吉田に移転)

移転改築工事は山口代官に委任されたが、特に藩から銀20貫目が工事経費として支出されたため、在住諸士は感激し、進んで土木工事に従事した。このため、同年9月、僅か4ヶ月足らずで新校舎が落成し、11日からは授業を開始した。

山口町村図(山口県文書館所蔵)



円の中にあるのが
亀山(長山)

山口御茶屋



講堂はここ

新校舎は亀山東麓の高台に東面して講堂があり、講堂を中心として諸生寮、書庫、剣槍弓術の塾、会所、大砲置場が並んだ。

亀山移転後の山口講習堂

山口明倫館

文教の中心は萩から山口へ

文久3(1863)年、攘夷決行に備えた藩庁の移鎮により、山口は政治、軍事の要所となった。教育についてもまた同様で、萩の明倫館諸生は概ね山口へ移り、「山口講習堂」は、「山口明倫館」と名を変え、萩に代わって山口が文教の中心となった。

しかし幕末の動乱の中、山口明倫館は、長州征伐のあおりを受け、藩の中樞が萩に戻ったため、元治元(1864)年12月には一旦廃止を余儀なくされた。慶応元(1865)年、再び山口の居館に戻った藩主・敬親の指揮により、廃止から3ヶ月後の3月、山口明倫館は復興した。再び長州征伐が行われる気配もあり、優秀な人材の育成が急務とされた。

山口明倫館の編成

山口明倫館は、文学寮と兵学寮に分かれ、兵学寮は歩・騎・砲三兵塾と三兵学科塾(後に兵学科)があった。また、文学寮には、基礎教育を行う「小学舎」や歴史編纂を行う「編輯局」が附属していた。

時局に応じて、山口明倫館での教育は、軍陣への実用に眼目が置かれ、兵学により重点が置かれた。文においては人材の輩出、武においては有能な士官の養成が、それぞれ第一義とされた。また人材の育成が急を要していたため、騎兵塾を除いては定員を設けなかった。

●文学寮 …国学や漢学を学ぶ

- ・本学寮
- ・漢学寮

小学舎

編輯局

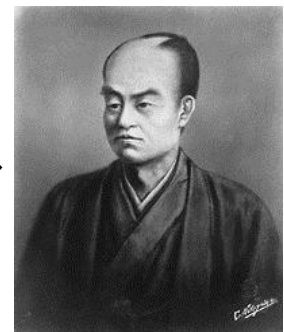
●兵学寮 …洋式兵学を学ぶ

- ・歩兵塾
- ・騎兵塾
- ・砲兵塾
- ・三兵学科塾(1866年～)

三兵教授役・大村益次郎

兵学に重点を置いた山口明倫館では、慶応2(1866)年4月、大村益次郎を三兵教授役として迎えた。益次郎は、近代兵学を教育し、第一線で活躍できる士官の養成に尽力した。その一方で軍政用掛も兼任し、藩における軍政面の指導者として活躍した。

明治維新後は、新政府に出仕し、戊辰戦争における軍事的手腕は有名である。その後も軍事関係の要職を歴任した。



大村益次郎

国立国会図書館「近代日本人の肖像」より転載

明倫館までの予備的教育

藩では明倫館の他に、小学舎や郷校を設けて領内全域において教育の振興をはかり、人材の登用を行った。小学舎及び郷校を修了した優秀な者は、明倫館へと進学するルートができあがった。

●小学舎 …明倫館入館までの基礎教育

山口講習堂で行っていた小学教育を引き継ぎ、正式に制度化したもの。文学寮に附属した。

16歳になると、歩兵塾で90日間の基礎訓練を受け、明倫館に入学

【対象】7、8歳～15、6歳の藩士子弟 →慶応元(1865)年の再興以降、身分の区別なく入学許可

●郷校 …地方の教育振興と人材育成

慶応3(1863)年、藩は諸郡の勘場付近に郷校設立。藩から毎年米500石の支給があり、庶務は代官所、学事は両明倫館が管理した。

16歳になると、代官が臨校して試験を行い、優秀な者は明倫館に入学

【対象】8歳～15歳までの在郷諸士。希望に応じて一般(陪臣・寺社家・農民・町民)の子弟も入学許可

明治新体制とともに

明治維新後、藩は職制を改定し、山口・萩両明倫館学制を統括する学校主事を長官として各1名置くこととした。これにより、両明倫館は領内の最高学府となると同時に、教育行政の中樞を兼ねることとなった。

幕末山口市街図(山口県文書館所蔵)



山口中学

明倫館から中学へ

国家建設のため、明治新政府は教育改革を漸次進めた。明治3(1870)年、大学(現在の文部科学省)は「大学規則」「中小学規則」を公布した。この規則では、学校を大学・中学・小学の3種に分け、中・小学校は各府藩県に設け、大学は中央に唯一校を置くこととした。小学から中学、そして大学へという進学概念が初めて示された。この制度は人材抜粋の精神に裏付けられており、中学が諸藩の逸材を選抜して大学に貢献するという役割を担っていた。



山中健児の碑(山口市パークロード)

「中小学規則」を受け、同年11月、藩は山口・萩両明倫館をそれぞれ「山口中学」「萩中学」と改めた。同時に、学内各部の呼称や規則も改め、歩兵塾は歩兵講習所、砲兵塾は砲兵講習所、騎兵塾は乗習所とした。また、明倫館の所轄であった三田尻講習堂や旧支藩設立の諸学校、諸郡の郷校は小学とした。

山口・萩中学では、まず8歳～16歳までの者が文学寮で学び、17歳になると一旦退学し、身体検査の上、6か月間、歩兵講習所で修業した。その後、兵学寮、砲兵講習所、洋学寮(新設)のいずれかに進んだ。各科修業年限は3年で、毎年考査を行い、優秀な者を大学へと進ませることとした。

教育内容の変化

学科内容は、明倫館時代の延長であったが、藩知事・毛利元徳^{もとのり}の国際的に通用する人材の育成が急務であるとの考えから、積極的に外国人教師を招聘し、洋学教育に力を入れた。文学・兵学に加えて新たに洋学寮が新設され、寮舎も新築された。

明治4(1871)年、兵学寮、歩兵講習所、砲兵講習所が中学の管轄から離れ、陸軍局の管轄へ移った。これにより、中学には文学寮・洋学寮のみが残り、その教育内容は大きく変化した。山口中学は普通教育の場に転換し、軍事的色彩は全く見られなくなった。



外国人教師たち
(『山口県教育史』より)

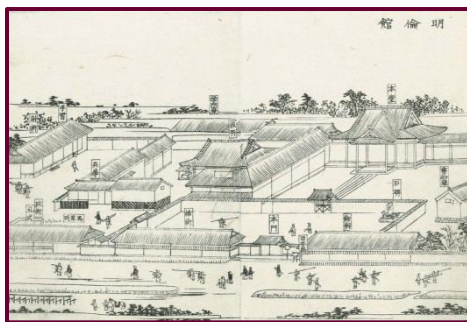
同年7月、廃藩置県が行われ、山口中学は県の管轄に移った。明治5(1872)年、政府は欧州諸国の教育制度を模範とし、国民皆学を目標とする「学制」を公布した。この新制度への移行に伴い、誕生間もない山口中学は一旦廃止を余儀なくされた。後に、「山口変則中学」として再び歩みを進めることとなる。

関連資料

長州藩の学校

長州藩では、藩政の推移と深くかわりつつ、早くから家臣の教育に力を注ぎ、積極的な「人づくり」政策を行っていた。また、藩校や郷校による諸士子弟の教育のみならず、寺子屋や私塾など一般庶民を対象とする教育も活発であった。教育熱心な風土を背景に山口講堂も産声をあげ、激動する時代の趨勢とともに山口は藩の人材養成の拠点となっていたのである。

幕末期の主な藩校等



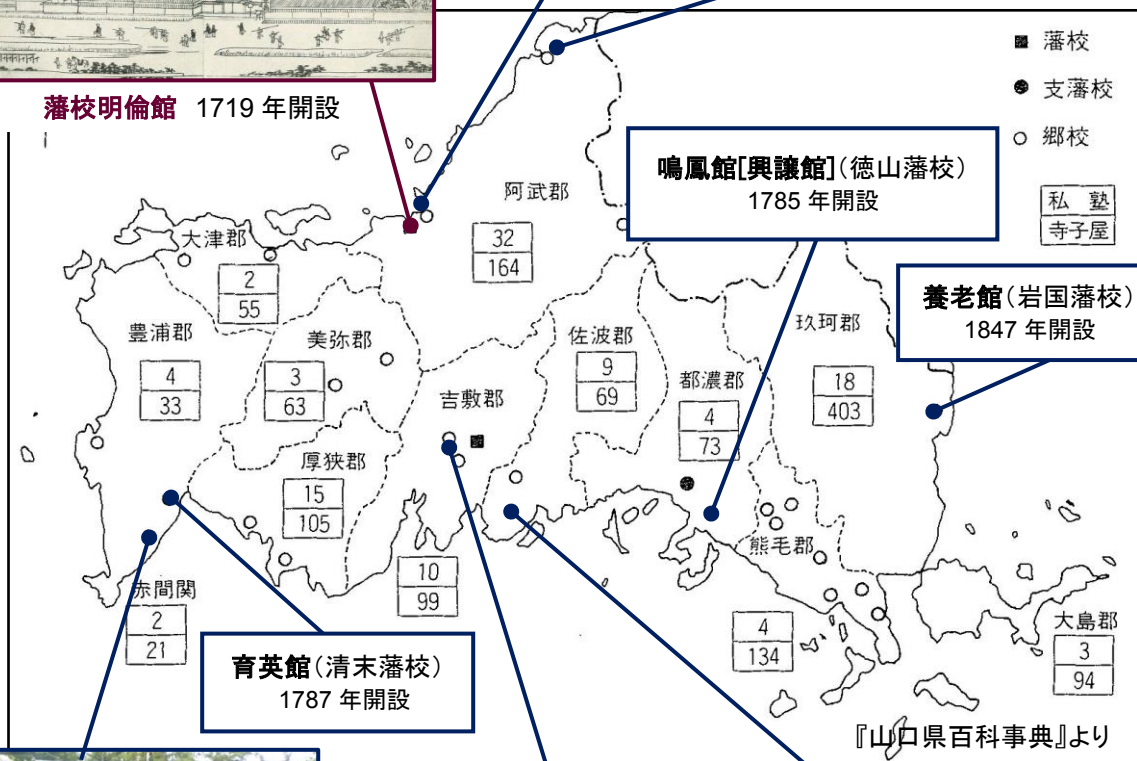
藩校明倫館 1719年開設



松下村塾(私塾)



育英館 1735年開設
(須佐、益田氏の学館)



敬業館(長府藩校)
1792年開設

憲章館 1805年開設
(吉敷毛利氏の学館)

時観園 1628年開設
(右田毛利氏の学館)

山口講堂[山口講習堂](私塾)
1815年開設

越氏塾(私塾)
後に藩校明倫館の直轄となり、
三田尻講習堂と改称

藩校明倫館

●創立 享保4(1719)年、5代藩主毛利吉元によって萩に創建された。吉元は財政再建の最中ながら、人づくりこそ治世の根底と考え、多額の経費を投じて藩校を設立した。明倫館という名称は「人倫上に明らかにして、小民下に親しむ」という孟子の言葉による。

●拡張 嘉永2(1849)年、14代藩主毛利敬親によって萩・江向に移転拡張。面積は約15倍、生徒数も10名程度から数百名に増すなど、飛躍的に規模を拡大した。広大な敷地に聖堂、講堂、書庫、書生寮、槍・剣・射術場、医学所等を完備した総合学園だった。特に、洋学による科学的・合理的思考の養成を進め、藩士の世界観を広げることに成功した。

●山口明倫館 文久3(1863)年、藩政とともに文教の中心が山口に移り、山口講習堂は山口明倫館と改称。従来の明倫館は萩明倫館と呼ばれた。以後、山口明倫館を中心に、萩明倫館と三田尻講習堂を両翼とする教育機関が整備されていった。

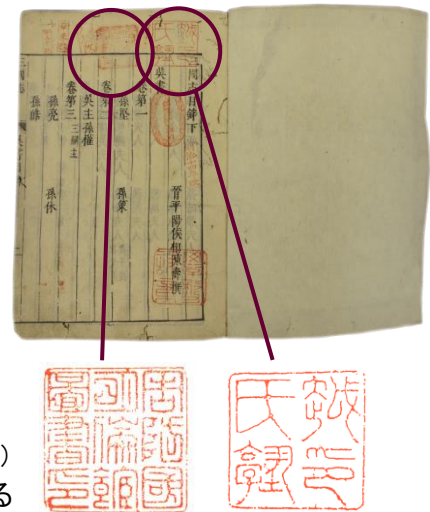
えっしじゆく
越氏塾

儒医・河野養哲が自宅に三田尻御船手組の子弟を集めて開校した私塾で、その時期は藩校明倫館以前に遡る。明倫館創設の際には、高弟の山根華陽らが同館の教師に登用された。明和4(1767)年に明倫館の附属校となり越氏塾と公称の後、明倫館の支配を離れて三田尻の郷学となっている時期もあった。

しかし幕末の万延元(1860)年、再び明倫館直轄となり、建物は上ノ丁から船頭町に移転拡張した。西洋銃陣の教練場も完成。文久3(1863)年、山口明倫館の管轄下に入り、翌年に学習堂、更に、講習堂と改称した。三田尻講習堂は、長州藩の軍事的拠点となったのである。

明倫館の稽古日割(享保7年)

| 稽古内容 | |
|------|-----------|
| 1日 | 休業日 |
| 2日 | 儒書 十文字鍵 |
| 3日 | 儒書 新陰流剣術 |
| 4日 | 兵書 槍術 |
| 5日 | 弓 新陰流剣術 |
| 6日 | — 新陰流剣術 |
| 7日 | 儒書 十文字鍵 |
| 8日 | 儒書 新陰流剣術 |
| 9日 | 兵書 槍術 |
| 10日 | 弓 新陰流剣術 |
| 11日 | — 新陰流剣術 |
| 12日 | 儒書 十文字鍵 |
| 13日 | 儒書 新陰流剣術 |
| 14日 | 兵書 槍術 |
| 15日 | 休業日 |
| 16日 | 弓 新陰流剣術 |
| 17日 | 儒書 |
| 18日 | 儒書 新陰流剣術 |
| 19日 | 兵書 十文字鍵 |
| 20日 | 弓 新陰流剣術 |
| 21日 | — 槍術 |
| 22日 | 儒書 新陰流剣術 |
| 23日 | 儒書 新陰流剣術 |
| 24日 | 兵書 弓・十文字鍵 |
| 25日 | — 新陰流剣術 |
| 26日 | 儒書 新陰流剣術 |
| 27日 | 儒書 新陰流剣術 |
| 28日 | 休業日 |
| 29日 | 兵書 弓・槍術 |
| 30日 | 休業日 |



越氏塾の蔵書(山口大学図書館所蔵)
越氏塾(右)と周防明倫館(左)の蔵書印が見られる

毛利敬親 文政2(1819)－明治4(1871)



長州藩第14代藩主。

文政2(1819)年2月江戸麻布邸にて、第12代藩主斉元の第1子として生まれ、天保8(1837)年4月、19歳で第14代藩主となった。

その時代、藩財政は長年にわたる赤字で貧窮し、世情は混沌としていた。敬親は藩財政改革や教育改革を行い、藩を立て直した。維新後の明治2(1869)年に版籍を奉還し、子・元徳に家督を譲って隠居した。

幕末の人材を創る

教育熱心だった敬親は藩校明倫館を15倍の敷地を持つ規模へ拡張する。西洋医学・兵学など洋学も取り入れた総合学園であり、時勢に適応する教育による人材養成を図った。

明倫館の隆盛が、藩内での郷校・私塾・寺子屋等教育機関の充実を促し、それまで脚光を浴びなかった中級・下級武士が歴史の表舞台に出るきっかけを生んだ。

萩藩では、山口来訪や江戸参勤の途中に、藩主が山口講堂の門弟の勉学を観閲することが慣例であったが、敬親も幾度となく足を運んでいる。また、十代の若さで明倫館教授になった吉田松陰を取り立てたことも有名で、藩主自ら勉強の進み具合を何度もテストしたというエピソードもある。



亀山公園にある毛利敬親の銅像

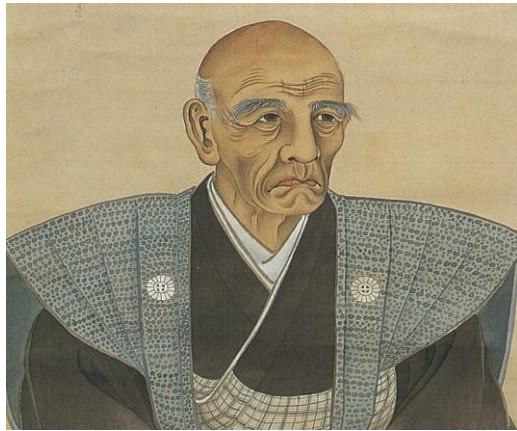
明治33年、敬親と支藩の当主たちの銅像がここで除幕されたが、戦時中ほとんどの銅像が供出され、敬親像だけが今もたたずんでいる

時代を拓いた“そうせい候”

家臣に対して異議を唱えることなく「そうせい」(うん、そうしなさい)と常に返答していた敬親は、世上“そうせい候”と呼ばれていた。島津斉彬や松平春嶽のように国政を直接リードする君主ではなかったが、時代の胎動期において人物眼のある、物事の理解力に富んだ名君だった。長州の独自性は、敬親に負う所が大きい。

村田清風

天明3(1783)－安政2(1855)



萩藩士、村田家の長男として三隅村に生まれた。父親は代官。14歳で藩校明倫館に入学し、成績優秀で学費免除、「明倫館書物方」に任命された。

26歳より行政官として50年間、5代の藩主なりふさ なりひろ なりもと なりとお たかちか(斉房、斉熙、斉元、斉広、敬親)に仕え、江戸屋敷や萩藩庁に於いて要職を歴任し、民政改革、文武奨励、兵制改革に尽力した。財政に明るく、特に敬親とは最強コンビで天保の改革を推進した。

藩政改革と人材育成

家老に抜擢され財政再建を任された清風は、周囲から激しい反発を受けながらも、負債8万貫の返済のための儉約の徹底や、武士の負債整理と士風の一新、四白政策(紙、蠟、米、塩)の振興など行財政改革を断行する。その一方、教育の重要性にも着目し、人材育成に力を注いだ。

- 江戸藩邸内に藩校有備館を設置
- 学問を奨励して学者を優遇し、藩校明倫館を拡張
- 医学教育充実のため、医学稽古場を設け、医学・蘭学の研究に努める
- 隠居後は、生家の三隅山荘に私塾尊聖堂を開設し、身分を問わず近隣の子弟を教育した

清風の改革路線は、周布政之助へ引き継がれた。教育政策によって、吉田松陰など多くの傑物を輩出し、明治維新の起爆力となっていたことは言うまでもない。



三隅山荘(長門市)

戦爺さん・村田清風

清風は、天保14(1843)年、福江村羽賀台で大操練(軍事訓練)を実施し、藩士の士気を引き締めた。長州武士団の意気高揚の契機を作った人物でもある。早くから国防に着目し、事ある毎に海防論と武備充実を強く説いた。そのため戦爺さんと呼ばれることもあったが、吉田松陰や周布政之助など、若き志士たちに大きな影響を与えた。

周布政之助 文政6(1823)－元治元(1864)

萩藩士、周布家の第5子として生まれた。家禄は68石。16歳で藩校明倫館に入学し、成績優秀で「明倫館廟司」に任命された。26歳で藩に登用され、蔵元検使暫役として山口に駐在、31歳で政務役筆頭となる等藩政を仕切る若手官僚の第一人者だった。

富国強兵を目標に村田清風が推進した藩政改革の跡を継ぎ、革新的政治家として藩内外の志士を指導し、明治維新への道を開いた尊王攘夷運動に全力を注いだ。



元治元(1864)年、蛤御門の変を起こし、幕府の征長軍を迎えることとなり、藩の実権も恭順派に握られたことなどから、責任を感じ、9月26日、山口市矢原の庄屋・吉富邸で自刃した。42歳であった。その志は高杉晋作や木戸孝允、伊藤博文らへと受け継がれ、明治維新へと開化した。

政之助の顕彰碑(山口市矢原)



周布の人材育成

有能な下級武士が政策に参加できる道を開いた。また、軍政改革の一環として洋学を推進し、西洋学所を設置。大村益次郎を登用。

吉田松陰の良き理解者で、松下村塾の高杉晋作、久坂玄瑞、木戸孝允らを積極登用し庇護した。攘夷後開国論だった周布は、西洋の事情を熟知しなければ将来国の不利益になると考え、イギリスに5人の若者(長州五傑)を秘密留学生として送り出した。



長州五傑

酒好きの正之助



周布は酒癖が悪かったといわれる。慰労の酒に酔って「容堂公は尊皇攘夷をおちやらかしなさる」と、土佐藩士たちの前で藩主の山内容堂を侮辱。激怒した容堂公は処断するよう迫るが、萩藩では「周布は不敬を悔いて死にました」と言いつつ謹慎処分にし、麻田公輔と改名させて騒動を終結した。

政之助の酒が過ぎるのを諷めるために木戸孝允が書いた戯画が、山口県立博物館に所蔵されている。

年表

| 時代 | 山口大学創世期 | 県域事項 | 国内・海外事項 |
|--------------|--|---|--------------------------------|
| 1719 享保4 | 萩藩6代藩主毛利吉元、萩に明倫館を創建。1.12 創立時、似閑本多数を伝写する。(山口県立図書館に現存) | 徳山藩再興。毛利元堯家督相続。5 | 1716年(享保元年) 徳川吉宗、征夷大將軍になる。 |
| 1727 享保10 | | 河野養哲死去し、家宅が稽古場となる(越氏塾の創設)。9 | |
| 1767 明和4 | | 三田尻の稽古場、越氏塾に。 | |
| 1769 明和6 | 上田茂右衛門(鳳陽)、萩藩の下級藩士宮崎猪兵衛在政の三男として生まれる。 | | ジェームス・ワットが新方式の蒸気機関を開発。 |
| 1776 | | | アメリカ独立宣言。 |
| 1779 安永8 | 毛利重就、滝鶴台の権白をもとに明倫館の仕方をあらため、文武興隆・人材抜擢をはかる。3 | 越氏塾、三田尻上ノ町に移る。 | |
| 1785 天明5 | | 徳山藩校鳴鳳館創設。5 | |
| 1800 寛政12 | 上田鳳陽、明倫館に入学。11 9年間在学。 | | フランス革命。(1789.7.14~1794.7.27) |
| 1809 文化6 | | 熊毛郡三丘の穴戸氏が、郷学徳修館を設立。6 | |
| 1814 文化11 | | 大野毛利氏が弘道館を創立する。4 製糸・織機の技術者を萩に招き、婦女子に伝習させる。 | イギリスのステブンソンが蒸気機関車の運転。 |
| 1815 文化12 | 上田鳳陽、山口講堂設立。4.15 藩主斉熙、氷上山興隆寺参詣の途中、山口講堂における門弟18名の勉学を視察。4.19 | | ワートルローの戦い-ナポレオンがセント・ヘレナ島へ流される。 |
| 1816 文化13 | 上田鳳陽、萩明倫館に再入学。8 | | |
| 1817 文化14 | | | イギリス船が浦賀に来航。 |
| 1822 文政5 | | 霍乱病(コロリ)流行。死者1000余人にのぼる | |
| 1823 文政6 | | 徳山藩校鳴鳳館内に医学館が設置される。岩国領で「家中古文書纂」が編集される。 | |
| 1825 文政8 | | 萩藩で戸籍仕法の改正 | 異国船打払令 |
| 1826 文政9 | | シーボルトが江戸参府途中で下関を訪れる。1 女流俳人菊舎尼が死去。8 | |
| | | | シーボルト事件 |
| 1830 天保元 | | 吉田松陰生まれる。8 | |
| 1831 天保2 | | 天保の大一揆(11月鎮静)。7 村田清風、江戸当役用談役となる。10 | |
| 1832 天保3 | | 村田清風、改革綱領執筆、以後の天保改革の基本となる。2-3 | |
| 1833 天保4 | | 木戸孝允生まれる。6 防長両国で夏以来風雨洪水が発生し、損害高5万7003石余に及ぶ。 | 天保の大飢饉。 |
| 1835 天保6 | | この年もまた風雨洪水が発生し、損害高13万7百石余に達す。 | アメリカのモールスが電信機を発明 |
| 1836 天保7 | | 萩藩主毛利斉元死去。9 斉元を継いだ斉広も死去。12 風雨洪水の損害高は27万7千石余にまで増大する。 | |
| 1837 天保8 | | 毛利敬親、第14代藩主就任。 | 大塩平八郎の乱。2 |
| 1838 天保9 | | 村田清風、藩政改革に着手。 | |
| 1839 天保10 | | 高杉晋作生まれる。8 | |

明倫館

山口講堂

| 時代 | | 山口大学創世期 | 県域事項 | 国内・海外事項 |
|--------------|--|---|---|---|
| 山口講堂 | 1840 天保11 | 村田清風、明倫館の拡充を藩主に建言。 | 村田清風、「流弊改正意見」を藩庁へ提出 萩藩、天保改革を発令。7 下関の越荷方を拡張する。11 萩南苑内に医学所を設置、青木周蔵を蘭書翻訳掛とする。11 | アヘン戦争(～1842) |
| | 1841 天保12 | | 伊藤博文生まれる。9 防長風土注進案の編集始まる。1 幸判ごとに学校を建設させる。2 | 水野忠邦、天保改革に着手。 |
| | 1842 天保13 | | 玉木文之進、松下村塾を起こす。 諸郡村ごとに「風土注進案」の録上を命ずる。 上田鳳陽、防長風土注進案の山口幸判を編集。 | 幕府、異国船打払令を緩和。 南京条約、香港割譲。 |
| | 1843 天保14 | | 村田清風、大津郡三隅に郷学尊聖堂を設立する。 | |
| | 1844 弘化元 | | 村田清風退陣、坪井九右衛門実権を握る。6 | オランダ国王幕府に開国を勧告。 |
| 明倫館 山口講習堂 | 1845 弘化2 | 山口講堂を山口講習堂と改称。1 | 青木周蔵を長崎に派遣、海外事情・防御の法を検討させる。10 厚狭毛利元美が郷学朝陽館を再興。 | 米船来航。2 英船来航。7 学習院、京都に設置。12 |
| | 1846 弘化3 | | 萩藩、戸籍法を改正。7 | |
| | 1847 弘化4 | | 坪井派後退、改革による取締り再強化。 萩藩、西洋書翻訳掛をおく。2 岩国養老館開校。5 | |
| | 1848 嘉永元 | 村田清風、明倫館再興用掛となる。9 | | この年、佐久間象山洋式野戦砲をつくる。品川に砲台を築く。 |
| | 1849 嘉永2 | 明倫館萩市江向へ拡張移転。2 萩南苑の医学所を明倫館に移し、済生堂と改称。 | 萩藩内で初の種痘実施。10 | |
| | 1850 嘉永3 | 医学所済生堂を好生館と改称、新築落成。6 | | |
| | 1851 嘉永4 | | | 水野忠邦死去。2 太平天国の乱(～1864) |
| | 1853 嘉永6 | 上田茂右衛門(鳳陽)没(85歳)12.8 | この年、洪水早ばつ被害大。損害高20万7千石余に。 ペリー艦隊の浦賀来航に際し、萩藩大森に出兵。6 | ペリー浦賀に来航して開国要求。 露船下田に来航。6 オランダ商館長、幕府に開国を勧告。8 |
| | 1854 嘉永7 | | 吉田松陰、金子重輔と共に下田で米艦に密航をはかり失敗。3 | ペリー再来航。1 日米和親条約。 日英和親条約締結。8 日露和親条約締結。12 |
| | 1855 安政2 | | 村田清風死去。5 周布派に代わって、坪井・椋梨派が改革綱領を出す。8 萩藩に西洋学所開設。9 | 江戸大地震。12 日蘭和親条約締結。12 |
| | 1856 安政3 | | 洋式軍艦丙辰丸が萩小畑で建造される | ハリス下田に来航。7 |
| | 1857 安政4 | | 吉田松陰、松下村塾をおこす。 | ハリスと下田条約を結ぶ。 |
| | 1858 安政5 | 萩明倫館より島田清吉・平田源吾の両名を山口講習堂へ教育掛として派遣。8 | 藩政府員交代、坪井派に代わって周布派登場。6 藩政改革綱領決定。諸村諸商人免札仕法を出す。8 吉田松陰投獄。12 萩、上ノ原に反射炉を築く。 | 徳川家茂14代将軍となる。5 日米修好通商条約調印。6 安政の大獄はじまる。9 天津条約 |
| | 1859 安政6 | 山口講習堂の稽古方経費を明倫館の経費より支出。1 明倫館助教山県半蔵を山口講習堂へ派遣して諸事を統率させる。(明倫館の管轄下へ組み込まれる) | 薩長交易成立。2 藩、西洋学所を博習堂と改称、拡張。8 吉田松陰、江戸伝馬町で処刑。8 | |
| | 1860 万延元 | 藩の学制改革に伴い、山口講習堂で洋式銃陣の操練を実施する。1.12 山口講習堂に練兵場を新設する。8 山口講習堂を藩政府の直轄とし、その教官は明倫館助教と兼任し、総てを明倫館の学制によることになる。11 | 越氏塾、三田尻上ノ町から船頭町北側に移転・拡充、藩学に準ずる。 萩藩、兵制を洋式に改革する。 この年、諸幸判に郷学校を建て、農兵訓練を発令。 | 勝海舟ら咸臨丸で渡米。 桜田門外の変(井伊直弼暗殺)。3 |
| 1861 文久元 | 明倫館直轄後初の山口講習堂稽古式。1.12 山口講習堂を中川原から亀山の東麓(長山)へ拡充・移転。9 11月より授業開始 明倫館内の好生堂を萩瓦町に新築移転。好生堂あとに博習堂を移す。 | 長州藩、航海遠略策の藩是を定める。3 長井雅楽、航海遠略策を朝廷に説く。5 萩上津江に火薬製錬場を設置、山口天花にも設置する。 | 米、南北戦争(～1865) | |

| 時代 | | 山口大学創世期 | 県域事項 | 国内・海外事項 | |
|-------------|-------------|---|--|--|---|
| 明倫館 | 山口講習堂 | 1862 文久2 | 3月、長井雅楽、改めて航海遠略策を朝廷に建白。5月却下。高杉晋作、長崎より上海に着く。4 7月帰着。高杉晋作ら英公使館を襲う。12 | 坂下門外の変。1 皇女和宮降嫁。寺田屋騒動。4 生麦事件。8 独、ビスマルクの執政開始。 | |
| | | 1863 文久3 | 大村益次郎が明倫館兵学寮総官・教授として山田顕義等普門寺塾(別名三兵塾)生に対し士官教育を行う。山口講習堂を山口明倫館と改称。従来の明倫館を萩明倫館に。11. 26 山口講習堂での小学教育を制度化、教諭役高橋真作宅を藩が借り上げ開校。後、山口県師範学校敷地に移転。 | 薩英戦争。米、リンカーンの奴隷解放宣言。八月一八日の政変。 | |
| | | 1864 元治元 | 山口明倫館文学寮を本学寮・漢学寮の二部に分ける。7 萩明倫館内の洋学館博習堂を山口博習堂と合併。7 山口明倫館の学業・訓練中止。10.25 山口明倫館兵学寮を萩に移す。11 山口明倫館廃止。12.12 | 三田尻越氏塾を学習堂と改称。2 大村益次郎の建議で、製鉄所を阿武郡川上の亀ヶ瀬に設置。5 京都池田屋事件。6 井上聞多・伊藤俊輔らイギリスより帰国。6 京都で禁門の変(蛤御門の変)が勃発、久坂玄瑞・来島又兵衛ら戦死。英仏米蘭四国連合艦隊、下関を砲撃。8 周布政之助自刃。9 藩政の主導権が保守派(恭順派)に移る。高杉晋作下関で挙兵。12 | 禁門の変(蛤御門の変)。第一次長州征伐。 |
| | 1865 慶応元 | 一旦廃業となった、山口明倫館文学寮所管の小学舎を再開。山口町奉行の所管とし土庶の別なく入学を許可する。3 山口明倫館復興。4 毛利敬親父子、山口明倫館で文武研修の要を訓示。5 高録の士の子弟教育のため山口明倫館に学舎を特設(成器塾)。11 | 美祿郡で大田・絵堂の戦いが始まる。1 「武備恭順」の藩是決定。軍制改革開始。3 木戸孝允・高杉晋作馬関で越荷方管掌。8-9 越荷方拡大。 | 幕府、第二次長州征伐発令。 | |
| | 1866 慶応2 | 文学寮歩兵塾騎兵塾砲兵塾小学舎諸会定日を定める。1.18 兵学寮三兵学科塾規則を定める。1.23 成器塾を拡張しその教育は世子元徳の親裁と定める。3.22 山口明倫館の経費、年額米2千石と定める。12.8 | 赤根武人、山口鰐石河原で処刑。1.28 木戸孝允、西郷隆盛らと薩長同盟を結ぶ。1 蔵版局、長防臣民合議書を36万部印刷し、藩内に頒布する。3 四境の役開戦。6 | 将軍家茂が死去 一橋慶喜、15代将軍。長州征伐中止。 | |
| | 1867 慶応3 | 県下に郷校を設置。4 郷校を明倫館に附属させる。萩明倫館50周年記念祭を山口明倫館で行う。5.25 | 高杉晋作死去。4 加藤有隣、山口市金古曾に私塾詠帰塾を創設。9 | 大政奉還。10 明治天皇即位。1 「ええじゃないか」おこる。8 王政復古大号令。12 | |
| | 1868 明治元 | 鷹司淳丸・壬生胤丸、山口明倫館成器塾で修学。3 長崎から英語通訳伊藤弥次郎を招き、山口明倫館兵学寮に英学科を新設。6 明倫館を文学・兵学の2寮にわけける。 | 鳥羽・伏見で幕府軍と戦い、以後戊辰戦争に出兵。1 藩治職制による改革着手。11 | 鳥羽伏見の戦 五箇条の御誓文。3.14 戊辰戦争開始。新政府、開国和親を布告。1 江戸開城。4 江戸を東京と改称。 | |
| | 1869 明治2 | 明倫館の小学規則などを制定し学制を改革する。1 | 長薩土肥の藩主とともに版籍奉還を建白。1 毛利敬親隠居し、元徳が家督相続、山口藩知事に就任。6 山口藩人口戸数を朝廷に上申。戸数11万5768戸、人口50万7819人。大村益次郎死去。11 諸隊反乱(脱隊騒動)おこる。百姓一揆あいついでおこる。 | 版籍奉還。6 東京遷都。戊辰戦争終結。スエズ運河開通。 | |
| | 1870 明治3 | 中小学区の公布により萩明倫館を萩中学に山口明倫館を山口中学と改める。11.13 諸郡の郷校を小学と改称、山口中学の管轄になる。仏人クローゼにより仏学の講義。8 | 反乱諸隊指導者処刑。2 議事館を藩庁と称し、以後常備軍編成・禄制改革すすむ。舟木石炭局に英人モーリスを招聴し、洋式採炭技術を導入。5 山口藩で藩治の職制を改革、政事堂を藩庁と民事局を郡用局と改称、大属等の諸役をおく。10 | 普仏戦争。(～1871) 平民に苗字を許す。9 | |
| | 萩中学 | 山口中学 | 1871 明治4 | 山口中学に独人ベルリンを雇いドイツ学伝習所を開設する。2.10 山口中学に外国人教師英人ダルナー夫妻を招請する。11 | 徳山藩を廃し、山口藩に合併。6 廃藩置県で山口県・豊浦県・清東県・岩国県の4県を設置。7 4県を改め山口県を置く。萩・岩国・赤間関に支庁を置く。11 山口藩庁を山口県庁と称す。7 |
| 1872 明治5 | | | 大学所定中小学区に準拠し本校学科過程改正案を定める。3 文部省布達13号をもち従来旧藩の学校は廃止。山口中学は学規変更のため一旦停止する。9 | 山口・萩・岩国・豊浦の4中学区を置き、各々に変則中学を設ける。 | 学制制定。8 新橋・横浜間鉄道開業。9 太陽暦を採用。11 |

参考資料

山口大学図書館所蔵

| |
|--------------------------------------|
| 山口高等商業學校沿革史 / 山口高等商業学校 [編] |
| 山口大学三十年史 / 山口大学30年史編集委員会編 |
| 山口高等学校史：鴻南に羽搏く |
| 明治維新と山口市 / 山口移鎮百年記念祭実行委員会編 |
| アーカイブズガイド：山口県文書館所蔵：開館50周年記念 / 山口県文書館 |
| 増補防長人物誌 |
| 防長近世史談 |
| 防長史講和 |
| 山口県人物・史蹟・名勝及び天然記念物アルバム |
| 吉敷教育史 |
| わが鴻南の日々 / 旧制山口高等学校開校六十周年記念事業会編 |
| 花なき山の… / 鳳陽会編 |
| 絵図で見る毛利の風景 / 毛利博物館編 |
| 近世藩校の総合的研究 / 笠井助治著 |
| 経営参謀村田清風 / 霜月一生著 |
| 鴻の峰40年 |
| 山口県の教育史 / 小川國治, 小川亜弥子共著 |
| 山口県教育史 / 山口県教育会編纂 上下 |
| 山口県郷土史 / 内山薫著. — 歴史図書社, 1978. 下 |
| 山口県百科事典 / 山口県教育会編 |
| 山口市史 各説篇 / 山口市史編纂委員会編 |
| 山口市史 通史篇 / 山口市史編纂委員会編 |
| 人物を中心とした教育郷土史 |
| 図説山口県の教育100年：学制発布100年記念 / 山口県教育委員会著 |
| 図説山口県の歴史 / 八木充責任編者 |
| 大内村誌 / [山口県大内村編纂] |
| 長州閩の教育戦略：近代日本の進学教育の黎明 / 永添祥多著 |
| 長門國守護厚東氏の研究及び史料 / 川副博著 |
| 奮発震動の象あり：防長教育史の人びと / 松野浩二著 |
| 防長風土注進案 / 山口県文書館編修 |
| 幕末長州藩の人びと / 石原 啓司著 |
| 柳桜をこきまぜて：旧制山口高等学校外史 / 東京鴻南会編 |
| 學都山口と上田鳳陽 / 山口大學經濟學部鳳陽會編 |
| 榎野の流れ / 毎日新聞山口支局編 |
| ホウヨウ先生をさがせ！ |

山口県文書館所蔵

| | |
|--------------------|---------|
| 山口講堂劍館射術場并検使固屋共地差図 | 毛利家文庫絵図 |
| 山口長山稽古場差図 | 毛利家文庫絵図 |
| 御賞美先例 | 毛利家文庫 |
| 幕末山口市街図 | 藩政文書絵図 |



上田鳳陽碑(左)と服部東陽碑(右) (山口市宮島町)

創基 200 周年

山口大学の来た道 ↑

—山口講堂から山口中学へ—

2010年 発行
2013年 改訂
山口大学



「志」つなぎ 伝える 二百年